

リンクス大将の座右の銘は孫子の「彼を知り己を知れば百戦危うからず」である。産経新聞に書いてありましたが、あれども、要するにこれは洋の東西を問わない兵法の真理なわけです。栗林も八原も敵についても味方についても非常によく知る得る経験を持つていましたし、それからその知識を生かせる頭脳を持つていたと思います。

八原という人は戦後になって色々文章を書いていますが、頭のいい人だなと思わせるような文章です。

そういう彼らであるからこそあれだけの戦が出来た。しかし彼らの活躍というのはいまでもなく余りにも遅すぎた。知は力なりと言いますが、知識というものを力として活用しない、それどころか知っている者が排斥される風潮が、戦前、戦中の日本を支配していたのです。

アメリカの力の現実を知らずに、アメリカ力何するものぞというふうな勇ましい事を言う日本人が国を誤ったという事は否定できないと思います。

今後そういう失敗を繰り返さない為にも、知を力たらしめることがいかに大事であるか、それを日本文化の中に根付かせる努力をすることが、栗林中将の死を無駄にしない最大の所以であるというふうには、彼の生涯を振り返って私は考えておりますし、また栗林中将論を書いた最大の目的もそこにあります。

栗林中将の

奇跡的な統率

これから少し具体的に栗林中将の人となり、硫黄島戦から我々はどうな教訓を汲み取るべきなのかというふうな事について、私の思うところをお話していきたいと思えます。

硫黄島にアメリカ軍が上陸を開始する九カ月、昭和十九年の六月に栗林中将は小笠原兵団長として硫黄島に着任します。その際まず兵団司令部の位置を決定するわけですが、その決定の仕方がいかにも栗林らしい。

当初、軍中央は司令部を小笠原諸島の父島に置くように提案します。父島というのは小笠原の政治経済の中心地であり、すでに父島要塞司令部も置かれていた。司令部活動に不可欠の通信の中核でもあったという事で、軍中央の提案はいわば常識的な提案だったわけですが、栗林中将は硫黄島に直接兵団司令部を置くという、それを退けました。アメリカは飛行場が欲しいんだから必ず硫黄島にやってくる。小笠原防衛の最前線である硫黄島に出なければ、本当の意味での指揮は出来ない、そういう覚悟で硫黄島に進出したわけであり、

生き残った部下の一人が、最初の中将の決断に彼の統率の性格が象徴的に現れていると書いています。どんな時

でも栗林中将という人は部下と苦楽を共にする指揮官で、のうのうと父島にいて硫黄島の戦闘を指揮するなどという事を、最初から考えなかった。いかに通信が発達したとはいえ、父島で考える硫黄島は、「群盲の象に触るに似ている」、やはり指揮官たる者は部下の目に触れる第一線で部下と共に行動してこそ本当に効果的な指揮も取れる、そういう判断で栗林中将は硫黄島進出決断したのだというのですが、その通りだと思えます。

栗林が部下と苦楽を共にする指揮官であつたということについては沢山の逸話が残されております。日本兵は千人ぐらい捕虜になつて生き残つていますが、その捕虜たちが皆口を揃えて栗林中将のことに感激を持って振り返っているのが驚いたと、敵の大將スミスが言っています。硫黄島というのは至る所硫黄が吹き出す地熱の非常に高い所で、そこに地下壕を掘つて日本兵は持久作戦を戦つたわけですが、地下を掘る苦勞というのは並大抵の事じゃなかった。そういうところで本当に鬼じゃなければ言えないような命令を下して、地下を掘らせたにもかかわらず、兵隊達は口を揃えて栗林中将を感激を持って振り返っている。この中将はどいう人間なんだというふうにスミスは思ったということです。

そういう指揮官だったわけですから、彼の逸話についてはご存じの方も多いと

思いますけれども、やはり栗林中将という人の偉さを考えると省くわけにはいきませんので、簡単に代表的な例をいくつかご紹介したいと思います。

硫黄島というのは川が一本もありません。天然の水というのが全然無い。今でもそうです。何年前かに硫黄島に行きました時に、航空自衛隊の方が一緒に付いて来て下さったんですが、ペットボトルを持って来た。そして慰霊碑のところ、先ず最初に水を掛けます。水が無くてどれだけ苦勞したかということなんです。日本軍がやって来る前に、島民は千人程居た。その千人程しか居なかった時でも、水は大変な貴重品でしたが、そこに二万一千の日本軍がやって来たわけですから、水が足りる筈は無く、水不足には本当に苦しんだ。水が無い状態で地熱の高い地下を掘るわけですから、これはもう地獄の苦しみだったわけなんです。

そういうわけで硫黄島に内地から幕僚が連絡の為に来島することがあつたりすると、師団長への土産として一升瓶に詰めた内地の水を必ず持参したそうです。すると栗林中将は各部隊長を司令部に呼んで、たとえコップ一杯、つても皆に分配したといひます。そして彼は率先して節水に努め、これは有名な話ですけれども、毎日茶飲み茶碗一杯の水で髭を剃り、顔を洗い、残った水を手洗い用に使ったというのです。部下の参謀が書いていますけれども、

こういう鉄石の態度は兵団長独特のもので、誰も真似が出来なかつたそうす。ですからこの貴重な水を兵隊が無駄に使っている、栗林中将は顔を紅潮させて激怒したと言います。「水の一滴は血の一滴と心得ろ」という師団長命令を知らないか。お前が今使った水は、いざという時に何十人の命を助けると思ふか」と言つて兵隊を叱責して厳しい処罰も辞さなかつた。

水だけじゃなくて食料不足も大変深刻で、生野菜なんかは全くありませんから、栄養失調患者が続出しております。栗林中将もやせ細つて、「インドのガンジーのようになりまし」と奥さんに手紙を書いていきます。ある時作戦打合せの為に大本営の陸軍部の少佐が茄子とか胡瓜とかを籠に入れてお土産に硫黄島にやつて来たことがあつた。そして栗林中将は、僅か一籠の茄子や胡瓜を副官に命じて何百もの小さなかけらに切り刻ませ、司令部の周辺に居合わせた兵隊達に一片づつ分けてやつた。「貴重な本土の生野菜だぞ」と言つて皆に分けてやつたというんですが、その一かけらも自らは口にしなかつた。とこの少佐は書いています。

もう一つ、栗林中将の統率を如実に物語るといいますか、そういう象徴的な事実があります。先程言いましたように生き残つた将兵一千人は、栗林中将を感激を持つて振りかえるわけですが、皆口を揃えて言うのは、「自分は戦場

で栗林中将に会つた、しかも一度だけじゃない、何回か会つて」と言っているというんです。しかも単に顔を見たというだけではなくて、「ご苦労」と声を掛けられたとか、射撃の指導を受けたとか、恩賜の煙草を貰つたとか、歩兵、砲兵、通信兵、海軍兵、その兵種を問わず皆そのように感激を持つて中將の面影を懐かしんでいるのです。

阿部という中隊長の文章が残っているのですが、この人もやつぱりそうで、阿部中隊長が陣地構築を作業している部下が「年取つた将校さんがさつきからこつちを見ているよ」と言うので振り返つて見ると、顔を見たことのある師団長その人だつた。驚いて作業を中止して笑顔でこちらを見ている栗林中将の所へ行つて、新しい陣地を構築作業中であると報告したそうす。その時のことについて阿部が書いている文章を読みます。栗林中将は私をタコの木(タコの木というのは硫黄島によく生えている亜熱帯の樹木です)の陰に誘つてまず煙草を差し出し火も付けてくれた。こんな経験は始めてである。大隊長までならいつも顔を合わせて何でも言えるが師団長ともなると顔を見ることが殆どない。それが親しげに煙草を出し火を付けてくれるなんて普通考えられないことである。作業ズボンは汗と土まみれで上半身は裸。そんな自分に師団長は「お前は中隊長がご苦労だな」と言われた。それから自

分が兵士達の健康状態、陣地の状況など詳しく説明した後、師団長は一つ一つの陣地を熱心に見て回られて指導された。その後いく度か私の陣地に足を止められ、煙草に不自由しているだろうと何本かいただいたことを思い出す。米軍が上陸した場合は本土からの救援が無く、玉砕戦闘となることを承知で硫黄島に最高責任者として着任され、深く部下に思いを致して炎天下陣地を回られた心情が痛いほど胸にこみ上げて来るのである。

これは例外的な証言ではなく、生き残つた将兵が口を揃えてそういうたぐいのことを言っているわけです。そういうことを考えますと、栗林中将は二万あまりの守備隊の将兵全員と一度ならず口をきいた可能性があることになり、彼が島にいた日数は二百日程度です。彼が単純な計算をすると五十三才の兵団長が一日平均二百人以上の部下に声を掛けていく計算になる。実際栗林という人は毎日朝早くからずっと島中を歩き回っています。島の地形とか陣地構築状況とか隅から隅まで毎日、毎日チェックして歩いている。だから硫黄島について栗林中将以上に知っている将校は誰もいなかったと言われる

ぐらいに丹念に見て回つてますから、その過程で彼は声を掛けると言うことをやつていたんだと思います。

こういう栗林中将の統率について、陸上自衛隊で大隊長の経験のある自衛官が書いている事ですが、自分の指揮官としての経験から判断して「奇跡」と言いたい程の強烈な統率だと言っています。

栗林という人が偉いと思うのは、こういう強烈な統率をする彼が、同時に非常に繊細な文人肌の将軍でありまして、愛妻家で子煩悩で実に家族思いのやさしい面を持つていた。また兵隊達と本当に全然変わらないような人間的な弱さというものを持つていて、それを自覚してそういうものと戦つていた人だということが調べていくとよく判るんです。

今日ここに持つてきたんですが、最近小学館から出た『玉砕総指揮官の絵手紙』という本です。アメリカ留学時代から硫黄島戦の頃まで栗林中将が家族にせつせと書き送つた手紙を集めたものです。これをお読みいただくと、単に豪気だけではない、中將の色々な側面がお判りになると思います。

帝国陸軍の致命的弱点

栗林中將の帝国陸軍の軍人としての特質について考えますと、彼は欧米列強のどこの国に行つても一流の軍人として立派に通用したであろうかと、今の